

四季類作
沓草時記新集草
夏



新かきやま	夢の花	馬夢の心	夢の種	物夢の花	蕎麦の心	車前子	苗香の實	ふきふきの花	からす瓜	玉つさ	蕎麦	枝	つぎふし	蕎麦の花	種ふくべ	種あふび	大根	蕎麦	菜種	かぶし	蕎麦	けい	蕎麦	芥	小	菜	かぶ	芥
-------	-----	------	-----	------	------	-----	------	--------	------	-----	----	---	------	------	------	------	----	----	----	-----	----	----	----	---	---	---	----	---

俳諧歳時記新采草 卷之二

京都 山口素揚編輯

四月の 席杖競 菱蘆輪 貴布祿の所神 車二四月初日加茂の氏人

稲荷祭 即日官幣大社稲荷神社の祭ニ 神樂五基各氏地を渡所 伊勢

神衣祭 十四日 日本橋 神衣祭 神衣祭の神衣を 河の赤引の神調の系 岩梨

石蓀 三月 実を結 五月 葉を地 六月 葉を地

四季 八月 植物 四月 いは 五十七

部類 俳諧端 俳諧類 俳諧

まをりも 何 産

江 鮭 くらげ 藻

崩 葉 於 穴 へ 入

衣食類

袴 衣 礎

衣 打

衣 志 打

志 志 打

あや 打

新 絹 新 采

あし 采 除 穢 河

毛 ろ み 新 酒

中 込 古 酒 履

い 豆 履 如 美

古くは徳の和減りし二名をよびに用ひたりと云ふ

花のよき故と云ふ ●木芝薬 牡丹の異名二種 鮭花 鮭天

室中禁中初て木芝薬を重んずる四本を以てし 紅紫浅紅

通曰興慶池の東は香亭と云ふ所と云ふ ●北日草 牡丹

を三白氏文集牡丹芳在開落花二十日一城之人皆如狂

●花王 歐陽脩花名錄云 牡丹を謂て花王と

今 姚黄と真とを玉とて魏世に乃ち之を后と云ふ 名取則 牡

丹の一名二種の也 昔は男女の花を以てて愛てきく 極み

牡丹は自らあがの夜はもすくすく挿し置きてしを あそび

かるとして男の心ありと云ふ 誰れか 牡丹をよびて 牡丹

●夜白草 関元遺事 明皇沈香亭の前 牡丹一花二枝朝

深紫者ハ 黄夜ハ 粉白にして 香艶 古異之 帝曰これ花

木の枝と云ふ 揚国忠と云ふ 百室を以て 標とて 天降人

やとて 花をいふ 牡丹の花をいふ 牡丹の花をいふ 牡丹

●牡丹 牡丹の異名二種 又山標 牡丹の異名二種 牡丹

●牡丹 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種

牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹

牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹

牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹

牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹

牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹の異名二種 牡丹

神 祭

彼 岸 三 村 祭

堺 天神 祭 白 鬘 開 帳

敦 賀 祭 放 生 會

い け ぎ を 放 つ 妙 口 念 仏

お せ ぎ 今 由 ち ち ち ち

け ち ち ち ち ち ち

山 寺 也

道 十 八

故 主 合

こ 由



杜 鵑

和漢三才圖會 杜鵑の形は雀鷓之類

にして 尾尾 故 白 雲 の 懸 有

翅も羽も白き斑あり口中赤く頸は小冠を毛より 經 掌 蒼 色

を 前 の 指 ニ 連 紋 後 の 趾 ニ 連 紋 異 二 季 葉 異 二 季 葉

何んか けしき 夏 冬 異 二 季 葉 異 二 季 葉 異 二 季 葉

さゆ 杜 宇 子 規 野 鷲 郭 公 雀 鷓 野 鷲 郭 公 雀 鷓

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯 鶯

八月 神 祭 二 事 初 事 四 月 月 日 六 十

辨別 辨別 辨別 辨別 辨別

菅大臣祭 御靈祭

素名祭 菩薩祭

宰府祭 西院祭

公事故

駒 迎

聖月の約 上野の約

秋 眞司

秋 眞司

秋 眞司

九月之部

乾 坤

二重 陽 重 九

菅大臣祭 御靈祭 菅大臣祭 御靈祭

素名祭 菩薩祭 素名祭 菩薩祭

宰府祭 西院祭 宰府祭 西院祭

公事故 公事故

駒 迎 駒 迎

聖月の約 上野の約 聖月の約 上野の約

秋 眞司 秋 眞司

秋 眞司 秋 眞司

秋 眞司 秋 眞司

九月之部 九月之部

乾 坤 乾 坤

二重 陽 重 九 二重 陽 重 九

菊の節句 菊の節句

後の雛 後の雛

十三夜 後の名月

後の月 後の名月

秋の色 山粧

番時雨 番時雨

秋看暮 秋看暮

秋ふき 秋ふき

秋の眼 秋の眼

冬待 冬待

四季 作物類

九月 作物類

冬待 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

番時雨 作物類

秋看暮 作物類

秋の色 作物類

九月 乾坤植物 四月 十月

茶枕草 茶枕草

菅の臺 菅の臺

地王祭 地王祭

通鴨 通鴨

常盤木の落葉 常盤木の落葉

時鳥 時鳥

土塔會 土塔會

菅の臺 菅の臺

地王祭 地王祭

通鴨 通鴨

常盤木の落葉 常盤木の落葉

時鳥 時鳥

土塔會 土塔會

菅の臺 菅の臺

地王祭 地王祭

通鴨 通鴨

常盤木の落葉 常盤木の落葉

時鳥 時鳥

土塔會 土塔會

菅の臺 菅の臺

地王祭 地王祭

通鴨 通鴨

常盤木の落葉 常盤木の落葉

時鳥 時鳥

土塔會 土塔會

部類 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢 伊勢

菊の地を 菊の地を 菊の地を

残 桑 十日菊 後日菊

業 菊 合

白 菊 業 業

花の 菊 業 業

我 牡丹 仙 蓼

佛 甲草 小 蓮花

菊 菊 花 芦の穂

尾 花 散 杏子紅葉

鴨 上 戸

大神祭 神社 大神社 大和國 城上郡 在所 一座大

己貴命大神と大輪の神之大物主神の御事

中本縁ハ大輪大物主神活玉依姫と云女の

比小禪師 右田座同社

新五府中ハ火々出見尊を以て本社

日吉祭 老鶯 十論海辨抄

物 老鶯 老鶯 老鶯

を 老鶯 老鶯 老鶯

白氏文集 老鶯 老鶯

老鶯 老鶯 老鶯

老鶯 老鶯 老鶯

柿 紅葉

下 紅葉

紅葉散

水 紅葉

うら 紅葉

妙 紅葉

枯 紅葉

草 紅葉

踊草 和漢三才圖會

和哥 更衣之布子の縁を枝

祭 十七日 伊勢國和歌山

和清天 白氏文集 四月 天氣和旦清

若葉の花 貞享式 古式

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

和清天和 若葉の花

四季 俳諧 詩記 新集

九月 植物

四月 植物

六十二

楓 もももも

白膠木和葉 深もももも

梅 もももも

色久ぬ松 海さき

南天の実 深の实

棕の実 とちの実

核の実 ももの実

せんごんの実 菩提子

枳 九年女

柚 柑子

橙 木

金 柑

けん木 西梅子

楓 稔

檫 桐油の実

楓 茶

栗 栗

栗 栗

栗 栗

栗 栗

栗 栗

栗 栗

栗 栗

栗 栗

びてらまき... 何故か... せぬ... 今... 桜

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

若葉 新樹

部類 伊勢神宮 齋宮 齋庭 齋庭 齋庭

太秦祭	生玉祭	韃馬祭	神那宮別	新九日小袖	新萩麦	柚味噌	ふろし
牛	醍醐祭	中香宮祭	山口祭	綿	青豆	汁	酒
					柿茸	干	

紫白苜蓿 似くたるを... 肥大ニ世を名を正し... 中山ニ多ク愛され... 杜若を云ふ... ヤブミヤウガニ... カサクレ... 風車の花... かん志...

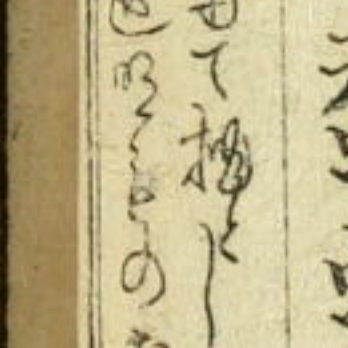
牛祭之圖



自文字の... 牛... 祭

四季非昔我寺已个三並

拈草草を用て... 一名咬蚕... 味ニ云... 白肉を飯食... 大和本草... 長尺余上... 在珍曰... 色翠ニ毛...



蠶蛹



蜉蝣



三隻物

稻相平

蟹 三年正月三日... 蟹... 蟹... 蟹...

九月神歌

四月水

六十五

花中け併

植物類

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

木の子母 木の葉時 木の葉時

鐵茶所の神を祀り此地を祠と蓋し神の福食を享るに依り里女婦を奉りて祭礼に必登鶏を戴き神を奉

も不音に少社のを祀りて神を奉るに依り里女婦を奉りて祭礼に必登鶏を戴き神を奉

て改く遊するものハ二股を用ひて度路のハ三股を用ひて神幸の後候中世堂羊の花を祀りて

用ひて神幸の後候中世堂羊の花を祀りて里婦笑顔を蓄りてお牧を重の控態のたのむ二箇を

胡まきまきあり世を王孫花 名医別録王孫ハ海西川編すつと見あり

下まき毎時日王孫和名ありハ往昔本朝のつて明らけし今後ものありは怪哉特々多毒の州にて瘰

病の功最大今本國の里俗 兼三夏物 津波須 王孫花と稱するもの也

和漢三國會鑑のハ五寸のときは彼後とあり西國にて和加奈とあり九月尺許のものを眼白と十月二

尺近きものを取るとつて江東にて伊奈太と云仲冬長三四尺をとりてを軋と云つて云

練供養 死年十二より十四まで大和西吉野ノ儀射掛佩の女中お船の忌日中お船尼とありて善心尼法如と云

お船の儀面を彫りて二月四月十四日法如の往生の日を以迎接會を修りて是日横川の花臺院よりお船を祀り

兼三夏物 根芋 和漢三國會鑑 和名伊毛加良一云伊毛之根云須伊木根云根芋

と稱するもの也 兼三夏物 根芋 和漢三國會鑑 和名伊毛加良一云伊毛之根云須伊木根云根芋

山祭 神田啓蒙 京三條猪熊四より又六角堂の南付に新羅神と云中山大以神と

中ハ新羅神と云中山大以神と云新羅神と云夏木立 元帝纂要 夏草曰茂草木

日射林茂林のハ新羅神と云中山大以神と云新羅神と云夏木立 元帝纂要 夏草曰茂草木

塩水を用ひて蒸乾し脯と云味を生りて美之倍なり 兼三夏物 夏の月

兼三夏物 夏の月 色鉛と云るもの也

十月 植物生業 四月ねむむ 六十八

四季 昨皆歳時已所撰草

生類

鶯の子鳥 **水魚**

鶯 **鯉**

鮎 **河豚**

杜 **生魚**

まんと **水鳥**

浮存 **鴨**

鴨 **鷹**

さす **鴨**

況 **免**

川 **鳥**

夏の霜 **夏** 國語 月照 平秋 夏
夜霜 五の詩

夏の雨 **夏** 五月 雨も夕まも
土 雨の詩

夏野 **夏** 百草の茂る 夏野
奈良を 夏野の詩

夏虫 **夏** 身をこがもく 夏虫
の詩

日向明神祭 **夏** 神社啓蒙 日向の神
社 日向明神祭の詩

結氷 **冬** 金葉集 応徳元年
四月 結氷の詩

麦秋 **秋** 礼月令 孟夏
月 麦秋の詩

麦刈 **秋** 和漢三才圖會
十月 麦刈の詩

梅宮祭 **冬** 神社啓蒙 梅の宮
祭 梅宮祭の詩



鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

鶯 **鴨**

四季 **俳諧**

四季 **俳諧**

四季 **俳諧**

四季 **俳諧**

四季 **俳諧**

十月 生熟 衣食 四月 むら 六十九

十月 生熟 衣食 四月 むら 六十九

十月 生熟 衣食 四月 むら 六十九

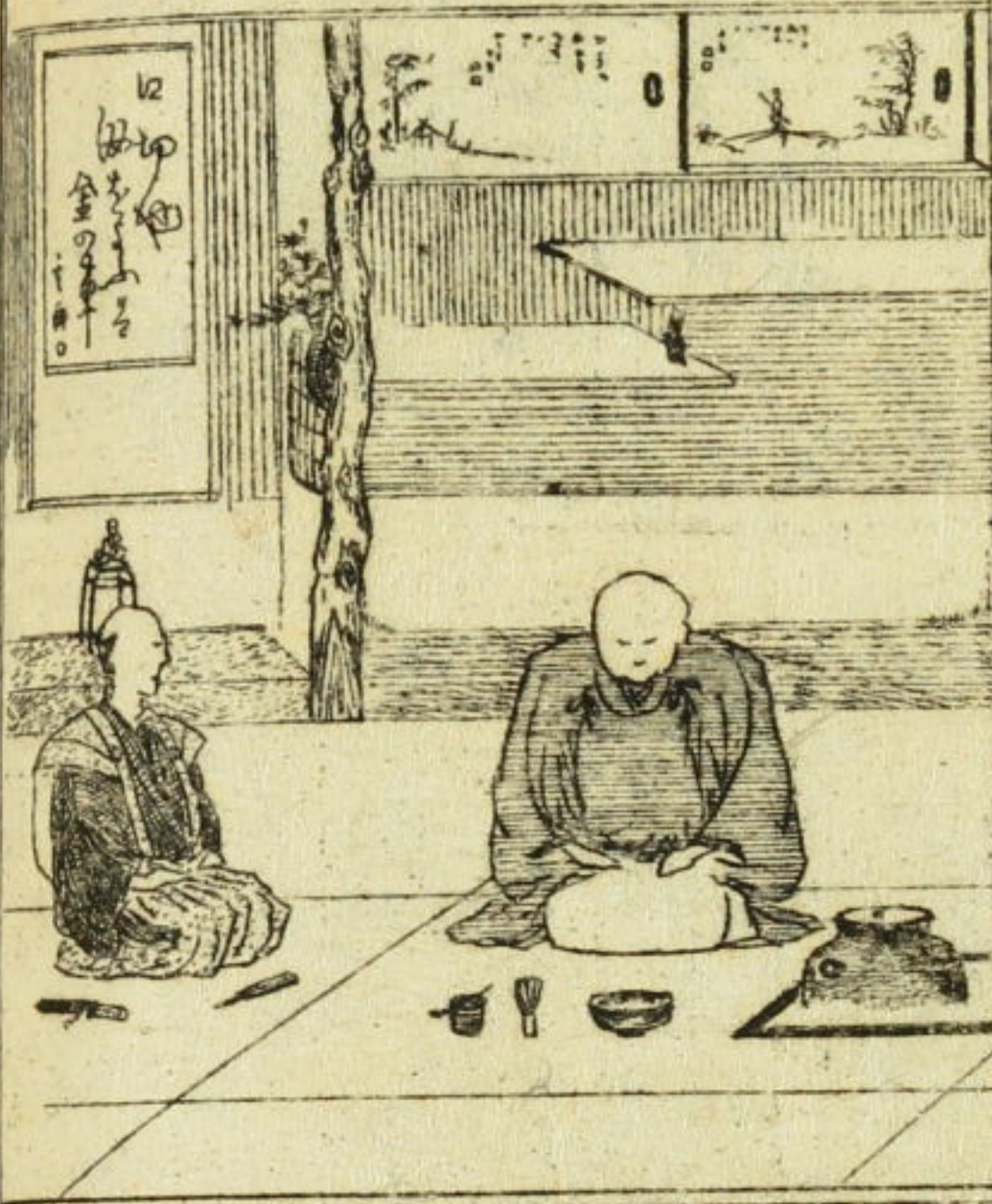
十月 生熟 衣食 四月 むら 六十九

木 兔 夜 鳥 引
 柴 積 竹 筍
 綱代守 糸
 あどろろ人

衣食類

茶の子餅 茶の口切

口切茶會之圖



干 莖 菊 切 干 大 根 菊 汁
 菜 漬 之 菜 汁
 海 蘆 湯 塩 麴
 貝 焼 湯
 納 豆 汁 湯
 大 根 吹 頭 巾
 紙 衣 袋
 綿 子 綿 子

式江流茅々由攝氏の祖席して世俗妊娠の婦女當社の砂をまきまき帯襟佩るは是檀林皇后嘉智子の遺風ニ〇近世官幣
卵の花
和漢三才圖會 揚子江

木唐空木三葉卵木山中有人垣根と樹を空木中空ちあるは空虛木と名づく文を流白く肌除青空にして長し四月小白花も之を箬をまき受まじ俗に卵花と云ふ十姊妹草根卵木と別れと云ふ京畿多し是も卵花と云ふは卵の状見州雪見草と名づく卵の状の卵の状の卵の状

卵花衣
和漢三才圖會 表白裡青柳同

次の花
和漢三才圖會 四月

夏枯草
和漢三才圖會 矢筒の靱の如し和名平流木

童子
和漢三才圖會 乃

鵲
大和本草 吉利子樹和名中久比す

鵲
和漢三才圖會 方扇俗云唐字知彼鵲也似之物を

扇
五雜俎 大明以前扇ありきり

鴨
和漢三才圖會 鴨和名鴨

鴨 和名之方 今云貯仍 鴨和名鴨云大あるを鴨導と云日本和名記小あるを鴨導と云〇弘景曰此鳥卵を生す鴨導を吐く〇美濃長良の鵜飼六月避暑流原乃海近園をも来る見物也所謂上川七艘下川七艘合十艘の舟長良の渡より少敷の渡まで三里の間を上川と長良より川下三里を下川と云上川の鵜を上品と下川の鵜を下品と云一舟十二羽鵜遣二人船當一人二舟の船先之鉄綱を下し鵜を舟に引寄せ鵜の鵜を舟の指股にさす持する鵜の魚を運ぶ鵜の手を舟にさす鵜の手を舟にさす鵜の手を舟にさす

部類 伊弉諾時言新牙草

神	神	古	小	厚	蒲
神の苗守	神	衾	衾	ふまき	園
大社神夏	送神の旅	衾鴛の衾	紙	ふまき	衾
神あろ丸	取越				
達六忌	奥福寺法花會				
金毘羅忌	維摩忌				
卯命講	法花會式				
十夜	聖一忌				

ハムリノルシキ... 解テ...

魚を吐... 又水中...

移遷長... 二天...

以禊養... 着...

貞享式... 此詞...

以て残... 夏...

足... 跳...

世祭... 中...

八月十四日... 丙戌...

真我萬代... 神...

欽明天皇... 卯...

又和朝... 詔...

國祭... 山...

蛭子講

梅尾虫供養

公事故吏

更衣

卯亥指

焦糴を喰

十一月の部

乾坤

曆賣

芝居顔見世

深雪

か...

中酒の日... 内...

草茂る

乳柑の花

千鳥

新撰万葉

我住温

是古き諺

勧農鳥

末の田をつ...

俱伎

羅

嘘の子

時珍曰...

此諺義を...

十月公故事...

四季...

部類

伊勢山科祭時新草

雪 志 雪 け 雪 垣

雪 竹 雪 佛

雪 女 雪 車

雪 音 雪 籠

雪 音 雪 氷

雪 音 雪 氷

雪 音 雪 氷

雪 音 雪 氷

雪 音 雪 氷

雪 音 雪 氷

雪 音 雪 氷

植物類

冬至梅 太山松

新生姜 志中うら塚

生類

ぬめ鳥 冬苦鳥

杜父魚 鯨

鰯 鷹

鷹 狩 鷹 世

鷹 匠 鷹 鷹

鷹 鷹 鷹

鷹 鷹 鷹

鷹 鷹 鷹

新撰六帖 世にうき色あひても花の子乃さるもくまをすくわさるめ

山科祭

社ハ勸修寺の南の境 内社 内大匠

八瀬祭 ありし今絶く只神撰を供するのニ 今世山科祭といハ諸明神

上展八王子天満宮両社の祭ニ天満宮の祠ハ愛宕郡大春 の里ニあり八王子の社ハ天満宮の巽ニ丁許の山盛ニ有

傳ハ菅家少年の時比叡山法性坊の室ニ入テ字文申テ 往來休息の所ニ後人社を建ツ土人祭の日大竹を切テ

山崎日の使

名勝志 八幡宮寺中讃岐ニ日の使 四月三日是郷万代の勤役あり山崎

三日山崎の民家悉く燈籠中毎年 燈籠ありて道に 燈をほき播磨大崎より八幡ニ奉りて是ハ昔此祭

日長者といハ一郷の上首といハ之を 山崎祭 日長者といハ一郷の上首といハ之を

雍州府志 山崎園山崎園ハ八幡の傍ニ有 矢数 矢数

平忠盛奉行して千鉢の観音を安置せ給ふ此堂を 建立す南北六十六間あり二層ニ柱あり故ニ三十三重堂

寛文二年五月二日名護屋藩士星野勘左衛門一昼夜に 八千九本を射通し貞享三年四月廿七日和宮山藩士和

山菅の花 今此堂の裏ニ射場を構射矢を賣ル 和漢三才圖會 賣子木今知佐の木ニ云處ハ山林ニありて

四季非指家持已行毛立

十一月植物生於 四月やま 七十二

部類 伊諸崇時詠新草

宗像祭 三島西の市

北祭 日吉臨時祭

鶴祭 吹革祭

空也忌 鉢たき

道祖神祭 大師講

春日御祭 多うけ

春日御祭 報恩講

春日御祭 東三奈神乐

神樂 里神樂

小忌衣 小忌の袖

山阿弥の袖 阿知女

神楽 神楽

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

早 採物 秋

故に各名を秋種をばせり白首の如く三四月蓋を

抽く青芭を結ぶ花をくくくくくくくくくくくく

辨大さ竹蓋の如くくくくくくくくくくくく

白まゆの香芙蓉あけの香春の如くくくくく

錦被花 蕙 白及 和漢三才圖會 蕙蘭 蕙即紫葉

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

蕙 蘭の如くくくくくくくくくくくくくくく

十月神歌公事故事 四月けふ 七十四

十二月之部
 十二月之部

右つり神鳥

日くげらうま庭燎

脚火焚

公事故夏

天長節曆奏

五節舞帳表の試

童女脚覽新嘗會

豐明符の使

鎮鬼

十二月之部

云何之佛を浴せん供言く我汝が為に浴佛の法を説ん
 諸の供養の中長深福とす衆の香湯を作して淨室の
 中をまず先方壇を作して多く妙林座を敷上之佛を置
 諸の香湯を以て次ぎに水を浴し香湯を以て以畢之
 被淨水を以て多く水を浴し一人名洗像之水を少
 しばし取て自ら頭上を多く浴し水を浴し
 の時、身骨を誦して云我今諸の如來を灌浴も淨智
 功德莊嚴五濁の汚生垢を離きためて願く如來の淨
 法身を證せん云龍華會 弥勒下生成佛經 時に菩
 提樹あり名て龍華と云慈氏菩薩の太子大慈菩薩下
 しあつて正覺を成し云是は龍花樹に下す木の下す
 弥勒は云正覺を成し云是は龍花樹に下す木の下す
 足を龍華の會と云之四月八日弥勒降誕の日也是ハ
 衆を浴し奉り也弥勒勸て違す結縁と云此ハ
 四月八日をすくす 不如歸 物論 啼苦 一むの
 物論 啼苦 一むの 崔尚錫食經 浴 浴 浴

蕪二隻物 風爐茶 浴 浴 浴

乾 坤

乙子朔日小寒

大寒

言さばし寒月

箒日

植物類

子咲梅 早梅

探梅 子咲梅

冬椿 言竹の子

孟宗竹

生類

四季作

十二月 乾坤植物生類衣食神叙 四月 七十五

十二月 乾坤植物生類衣食神叙 四月 七十五

部類 伊勢 丹波 備前 備後 美濃 越前 越中 能登 加賀 信濃 上野 下野 相模 武蔵 上野 下野 相模 武蔵 上野 下野 相模 武蔵

箕和田鯉取

冬鯉取

わつたぐし

鶺鴒菜をく

衣食類

乙子の餅

藥

喰

鯛味噌

水

鱒

寒造り酒

豆

膚

氷

あんにんく氷

神

釈

寒垢離

寒

念

佛

脚國忌

菰

入

菰八粥

温

糟

粥

最勝寺灌頂

佛

名

歴代... 氷を供

氷を供

室田... 氷を供

江州八幡祭

神社啓蒙... 氷を供

高野花供

を修め... 氷を供

木下閣

茂林... 氷を供

鯉

和名抄...

鯉魚性伏沈

一して石間...

慈鳥

杜若の... 氷を供

拾遺... 氷を供

て

かき... 氷を供

安天神祭

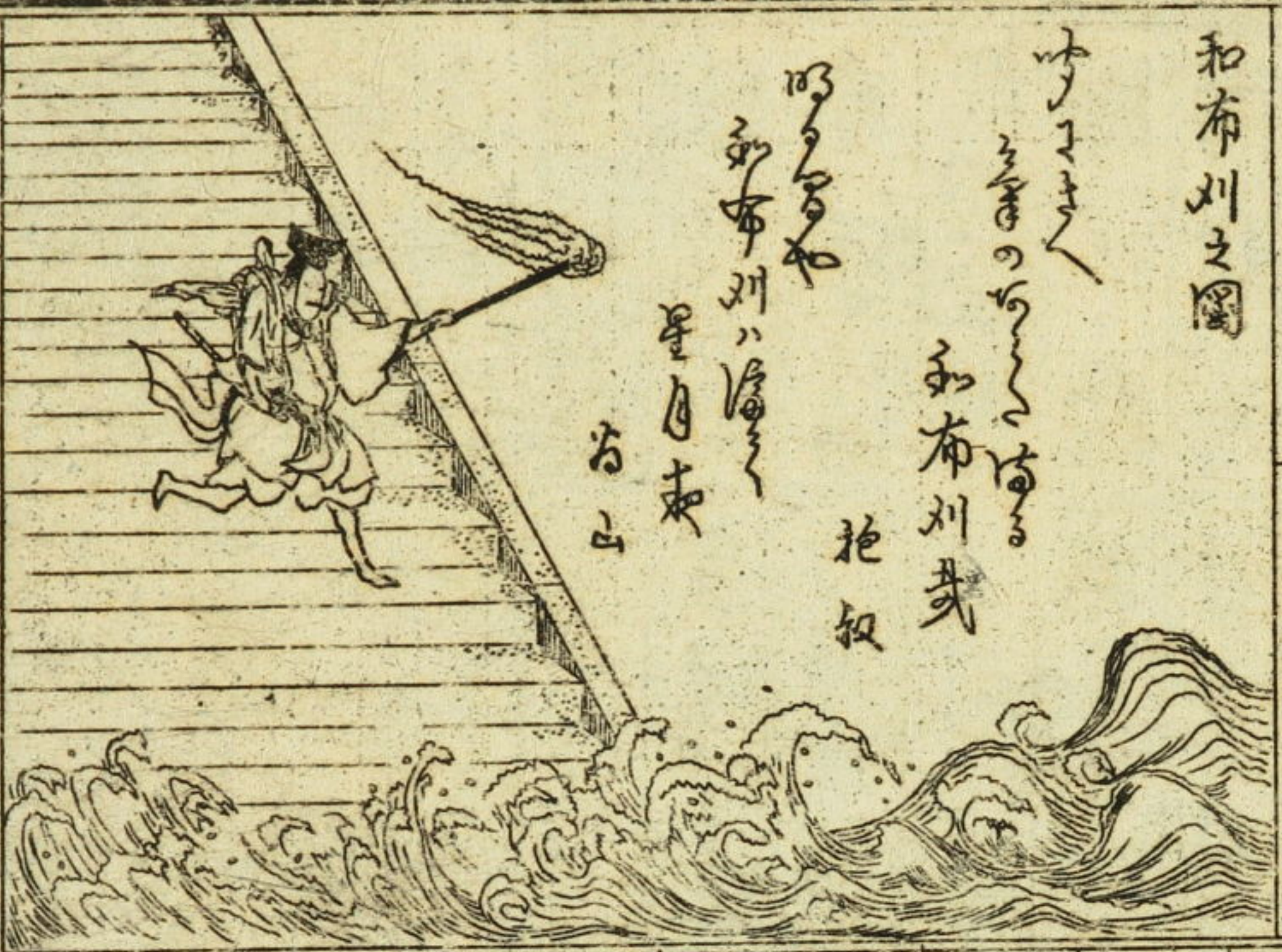
江州野海郡... 氷を供

再建... 氷を供

結球花

和漢三友... 氷を供

月花... 氷を供



和布川之圖

森宮繪馬

めうまの神事

おのまき

和布川哉

抱奴

おのまき

星目車

石山

部類 伊勢 京氏 言 京氏 言 京氏 言

公事改更

かづけ 海 舟 蟹 上

荷 花 使 匠 後

歳暮之詞

師 走 車 けし 免

節 季 以 う けら

煉 掃 ま じり

餅 搦 餅 花

糸 巾 以 青 むし ろ

糸 巾 以 節 分

糸 巾 以 終 寸

終 寸

豆 打 豆 を 中 中

寶 船 厄 掛

ばく の 枕 年 忘

年の 市 沖 折 垂 賣

種 長 賣 ぬ づ ぎ 紫 賣

葉 竹 賣 か や

飾 松 賣 門 松 けし ち ち

年 々 巾 抽 年 木 惣

年 々 巾 衣 配

年内 立春 羊 の 内 の 春

四季 非 終 時 已 所 終

狭く長し 掃帚の如く似く花 月 裕

日を更衣も此日より 裕を用ひ 青簾 青葉

一説に友山の如く 故青葉の葉を云 雨蛙 枝蛙

大和本草 土鴨 雨蛙 青葉

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

蜀葵 蜀葵 蜀葵

十二月 歳暮

四月 廿七

七十七

部類 自訓 歲時訓新 酉年

大原ざとね	吉田大枝
内待所神乐	五條天神治
<small>おとらふさ夫 湯のをもろ</small>	古 曆
暮さつる曆	古さ暮曆
曆の末	札 納
妻 待	喜 迄
春 隣	星佛賣
年 籠	年の暮
行 年	やしの末
年の終	年の尾
のりる年	<small>流るる</small>
惜むる年	やしの満

翔るそら鳥も美し
夏月と暮を愛せよ
すま山椒 アヲサンセウ 草之秦椒蜀椒

の二種あり、秦椒ハ毛葉對生尖て刺あり四月細花
はさき五月実を結ぶ生ハ青く熟ますは紅あり蜀
椒ハ釘の如き刺あり葉硬くして滑あり四月実を結
ぶ花赤く但枝の間ニ生ませば青く熟せば紅く
毛を青 アガツキ 時珍曰反獲四月苗を坐せ蔬と
山椒と云 アガツキ 蕪ハ灰糞の紅心ありとのニ葉葉精
大ある者老くは成莖枝もあべべ アガツキ
山中の老くは成莖枝もあべべ アガツキ
山中の老くは成莖枝もあべべ アガツキ

近江國日枝神社ハ滋賀郡坂本有登神大己尊之御
の日にあま坂本の山王祭年の刺通く田楽法隊
比叡の仙人遊々衆徒前驅して神樂を遊へ七社の神樂
山をとりあはれをりす アガツキ
山門の僧徒杖藜を携へ、坐をたせてあまをとり
横杖をとり アガツキ
京の山王町より供物を日吉の社に献じ、自ら天台の山王
皇の所望を アガツキ

時をよめはるる
門ねよとまふ
にまこころ



何をとよめはるるの市を行電 芭蕉
子をとよめはるるの市を行電 芭蕉
餅揚や犬の見上る 林の先 許大
以保くく人 アガツキ 年暮の 尚 運
我 アガツキ 尚 白
夫婦 アガツキ 尚 由

四季 非 昔 或 時 記 折 三 三

又江島馬場の地人神供を献じ、祭の日傳は二艘海上
に浮ぬ喜樂を奏して伴の神供を献備し、是を神供
船と云ふ アガツキ

嵯嵯祭 サガガガ 中 妻丹波玉素圓形水旗の北白雲寺
受石持現の アガツキ

別墅神樂三々三々 アガツキ
地 アガツキ
遊寺の権川 アガツキ
雲の神樂 アガツキ

桜の實 サクラ 和漢三才圖會 清明の節は花を アガツキ

赤思 アガツキ
味の甘美 アガツキ

花 ハナ 時珍曰相花筒を アガツキ

十二月 歳暮 四月 十五 七十八

部類 伊勢 崇時 新嘉 新嘉

かゝつて偶々古佛立ち多し羊の市 蝶夢
 衣の布や移り多し其鬼も素々 宗文
 種々多し昔の羊の一日の節 士郎
 餅をやはり多し其の盆の上 梅候
 多し其の昔の父の多し其行燈 幸山
 多し其行年や其の荒まき 幸池
 産も多し其の味も多し其年 幸彦

羊の別 羊の多	羊の限 羊の仕	小 小の日	大三十日 掛 取	かけを 見 除 取	大 年 除 取
------------	------------	----------	----------------	--------------------	------------------

忌日拾遺

義仲忌 正月二十日 近江栗津義仲寺	兼好忌 二月十日 西行忌 同上	千利休忌 二月廿日 蓮如上人忌 三月廿日	宗因忌 三月廿日 蟬上忌 五月十三日	石川丈山忌 同上 山城守治平等院遺跡アリ	頼政忌 五月廿六日 季吟忌 六月十六日	業平忌 五月廿八日 定家忌 八月廿日	宗祇忌 七月十日 芭蕉翁忌 十月十二日	夢宗忌 九月三十日 永観忌 十月三日	時雨會 枯野會 伊勢忌 十一月廿日
-------------------------	--------------------------	-------------------------------	-----------------------------	----------------------------	------------------------------	-----------------------------	------------------------------	-----------------------------	----------------------------

四季 伊勢 崇時 新嘉 新嘉

色類白く故く白桐と名く○格相一名青如狼狸○宗爽
 曰格相四月嫩葉少花を多く専ら花の如く大和本草格
 相又青相とく古人の行状を世せしは是世の白相多
 く格相格相和名格相格相三月花を琴瑟之作る格相
 是の金柑の花 木橘の如くして小くして五七尺葉
 の花 橙の如くして刺多し初夏白花を多く羊

蹄花 羊蹄根。時珍曰羊蹄ハ葉の長さ尺餘羊乃
 舌の形似く入る其葉を煮く

割葦鳥 葦原雀、葦
 鳥、葦割、
 和漢三才圖會 梅の如くして状後の葉似く大きき葉の
 如く其葉の硬あり長き尾曰次葦葦の中を在る
 好んく葦中の虫を食ふ其声
 善二夏物 木

布 曝賣。夏日本良曝布ハ講布木布の類
 曝賣するを生布と云ふ
 木布を曝賣するを曝賣と云ふ

鴨足草 本草綱目
 曝賣するを生布と云ふ

兼二夏物 內衣 和名抄 濕室云
 曝賣するを生布と云ふ

冥途の鳥 杜
 曝賣するを生布と云ふ

水産能 曝賣するを生布と云ふ

曝賣するを生布と云ふ

曝賣するを生布と云ふ

曝賣するを生布と云ふ

曝賣するを生布と云ふ

一卷之式

賦物

貞徳云連哥云五箇十箇
多賦物云云依格百韻云

つづけ言々賦物のゆはあし
も極端之連云と書る云々

兼門云賦物のゆはあし
云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

云々

行りて始り行りるゆへハ神楽あり
今も申樂四番あり地ハ終極を極
密柑の花 本草綱目樹の一名也
緑色二面光る四月少花

兼三夏物 短夜 明安
至の節書六

水鯨 和漢三才圖會 魚正字
硬く鬣短し下縁の線二三

水鯢 和漢三才圖會 魚正字
約魚和名 俗ハ毛唐音の異

蛇蛭出 月令孟夏月蟻蟬鳴蛭出
月令孟夏月蟻蟬鳴蛭出

海松 崔禹錫食經 水松狀
崔禹錫食經 水松狀

白重 和漢三才圖會 白重表裏
平絹更衣の時上下着之

棧欄の花 時珍曰二月木端
數の美色を出す昔中細

芍薬 和漢三才圖會 芍薬
出さる花を芍薬を裁す

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

葎藤 和漢三才圖會 葎藤
子あり列を多し乃花を

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

四字下界

部類 伊讀 岸田 言部 新草

是の字のつづつ文字を略して一人一人の

はの四字上り書たりてハ難波津を下

る子男ももつハはだそつめとつハを中

白雲ハ山の顔の化粧ノ如

是ハ白中のけを毛くすせしてつづ

二子除篇 龍門もつて都へのむき陸の奥

是ハ陸の字を意を以てして

他 源 是ハ毎の字を意を以てして梅と

和漢之事 大なる依傍の法を

以て五白を以てして限りて

通用するハ一 百韻二の物ハ和の

和漢之事 大なる依傍の法を

以て五白を以てして限りて

通用するハ一 百韻二の物ハ和の

和漢之事 大なる依傍の法を

以て五白を以てして限りて

通用するハ一 百韻二の物ハ和の

和漢之事 大なる依傍の法を

以て五白を以てして限りて

通用するハ一 百韻二の物ハ和の

和漢之事 大なる依傍の法を

以て五白を以てして限りて

通用するハ一 百韻二の物ハ和の

和漢之事 大なる依傍の法を

はの字のつづつ文字を略して一人一人の

胡蝶花 和漢三才圖會鳥扇

四千の田長 杜若の

鹿角 鹿角の

紙帳 紙を以てして作る

新茶 茶

塩鳥賊 南

連能韻表

四月

八十一

部類 御詠集 御詠集 御詠集

表八句 七月日 表十二句 七月日

二ノ表 十一月日 表十二句 初表

表十二句 二月表 表十二句 二月表

名残表十句 三ノ表 同表八句 七月日

七十二候

支考曰七十二候と云ふは三折と云ふ事にて三ノ折と云ふを八句と云ふ事也三折と云ふは三ノ折と云ふ事也

易

表八句 七月日 表十二句 七月日

表十二句 十一月日 表十二句 初表

多分の表十句 二ノ表 同表八句 七月日

支考曰易と云ふは易易六十四卦の卦を三ノ折と云ふ事也

源氏

支考曰源氏と云ふは三折と云ふ事也源氏の表十句にて中頃の各目ありて源氏の表十句を三折と云ふ事也

五十韻

百韻の二の表迄を五十韻と云ふ

四十四

支考曰四十四の五十韻の表迄にて二の折の表を八句と云ふ事也

歌仙

表六句 五月日 表十二句 七月日

名残の表 十一月日 同表六句 五月日

四季 卅皆或時已所

新麥

本朝金鑑 早まとの三四月熟し

菫菜

和名抄 菫菜 菫菜 菫菜

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

菫菜の似る水の上の層は多白く

部類 伊言 訓言 訓言 訓言

支考曰秋仙の名目の現流ニモハ十八番乃
奇合よりその誤人を秋仙と云ふを愛する
上下の句を合せて三十五の句と云ふ

長歌行

表八句 七句目 表十六句 九句目
十句目花

表十六句 十句目 同表八句 七句目
花

短歌行

表四句 月目 表八句 初句 月
七句目花

表八句 七句目 同表四句 三句目
花

長考行短歌行を未散の結語を看す則の支
考より新製なり(東華式)の(和漢文様本)の
序に委し

十八公

表十句 九句目 表八句 七句目
花

十八公は千歳不変の松を象うて題をと
るなり

首尾

表六句 五句目 表六句 五句目
花

支考曰首尾の終り一座の旨あり或は首尾の
終頭を祝し或は歳暮兼且の賀ふ始終を
このころ意ありさうして六句も八句も表と
裏の首尾を合せて月花二堂と稱する也

表合

八句 七句目

(西華集)支考撰凡例に表と神祇あり叙
最あり歳暮兼帯をさうして以て表合の
のちをいふと表の終りてはつとむる心
(南玄同答)去来云去来支考愛し終り
て亦七と表合あり我々信て曰元表合よの
庭掃の尋常の式と替へて表の中
一巻の安を込て去来ありとあるなり
と云ふ事ありと云へり一段面白う
と云ふ事ありと云へり一段面白う

四季 非皆或時記所延道

屋敷あり皆赤赤して白點あり棘鬚あり腹白し
味美あり以て惟皮を剥てまきを乾く皮類と名づく

蛭 同上 蛭は水中の濕る生まるとすは多し其有るを
一と云ふは水に浸るとすは其の毒よく化して毒ある

蟾蜍 蘇頌曰蟾蜍
蟾蜍を食して其毒を食ふとすは其の毒よく化して毒ある

濕處より形大きく皆上と毒多し行くと極く速く
後一躍して遠くを飛ぶとすは其の毒よく化して毒ある

蟾頭上より角あり腹の下丹青を肉並と名づく
精を食ふ人其を食ふとすは其の毒よく化して毒ある

取用ひく毒を起し酒を和り其毒を碎け
縛を解く今枝の毒蟾を裏の殻とすは其の毒よく化して毒ある

雙日記をやくと壁をふるふて毒あるなり
詳曰此句はいつに厚やと毒の申すは其の毒よく化して毒ある

とくそ毒を食へるなり其の毒よく化して毒ある
の毒よく化して毒あるなり其の毒よく化して毒ある

竹葉の毒を食へるなり其の毒よく化して毒ある
とくそ毒を食へるなり其の毒よく化して毒ある

扇を賜ふ 年中行事教合 夏冬毒あるなり其の毒よく化して毒ある

扇の毒 竹葉の毒を食へるなり其の毒よく化して毒ある

新の句を中へり此の句の句を侍を起すなり
新の句を中へり此の句の句を侍を起すなり

杜本祭 神祇傳本の命にて香取大吻神是
公事相傳 杜本祭四月十日二午日

文字榴花 和
使たつ仁和五年四月をふすなり

本草 莖の長きとすは其の葉の百合の如くして
月花を食へるなり其の毒よく化して毒ある

世千園子 十一本一木三千葉子
作は如例三

井寺の鬼子母神は今日の人妻を此神一千の子を
以て享るなり其の毒よく化して毒ある

石群のいさしのね 住吉卯の祭 四月
卯日祭あり住吉祭相傳は卯の自地と書跡ありとすは其の毒よく化して毒ある

一基瑞籬の外より三の門よりしては幸も神と及縁宜各
卯杖を待とすなり其の毒よく化して毒ある

窓の日竹馬菓餅を齧く者は 菅の宮祭 中
窓の日竹馬菓餅を齧く者は

首の綴り 四月 せす 八十三

四月 せす 八十三

四月 せす 八十三

發句

諸妙三一座の巻頭もきい京匠貴人老人の外
ちんくくくくくくくくくくくくくくくくくく
らうにんちちちちちちちちちちちちちちち
きんきんきんきんきんきんきんきんきんきん

脇句

發句の時節を違へず餘信をいひとらへし
發句神歌無常時宜は濃きまの脇句も同じ
そのちんくくくくくくくくくくくくくくく
難きまの發句云積をよそくくくくくくく
けしけしけしけしけしけしけしけしけし
のまじりくくくくくくくくくくくくくく
てその故をいひとらへしとらへしとらへし
おの下のくくくくくくくくくくくくくく
但し發句の限らば長句の意を幾し短
句の意を結ぶを格とすさのきを結
てててててててててててててててて
の体をあふはわわわわのまじりくくく
すむかたへくくくくくくくくくくくく
留るまじりくくくくくくくくくくくく
あたまにんちちちちちちちちちちちちち
てふあたまにんちちちちちちちちちちちち

右 続虚栗

添人く我名をうそんぬ
又山姥を痛く切りくくく 由之
霜月也 鶴のけりくくくくくく 荷合
そのおの日の妻を切りくくく 芭蕉
右 冬の日
いんくくくくくくくくくくくくくく
打撃くくくくくくくくくくくくくく 芭蕉
右 曠野

第三

諸妙三座高く颯のつらさをいひてい
ふくくくくくくくくくくくくくくくくく
らで留るまじりくくくくくくくくくくく
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
下白くくくくくくくくくくくくくくく
意結りてあまの心を失くくくくくく
留るまじりくくくくくくくくくくくく

四季

非書 戒時 已行 共道

神社啓蒙 小津の神社近江國野山郡在る所の神三座所謂
大宮二宮三宮是なり 神神の宇賀魂之神をせ菅宮子と稱

孫の子

和漢三才圖會 孫ハ小竹葉生して子のみハ依
葉の字を用ふ 亢孫ノ教種何馬藤兒孫
燒葉藤五收藤此年の荀皆藤の子あり又種長間行俗
奈伊竹と云長間竹簞箒其別ともてちちちハ苦きまじりて
貼く微りくくく 兼三夏物 涼 風土記 仲夏長風
含くくくくくく

蕪三夏物

蕪三夏物 涼 風土記 仲夏長風
扇暑注云 此節東

鮎

鮎 和漢三才圖會 鮎を釀る法塩少し
搦しあまを壓すと二三日にて

鮎

鮎 和漢三才圖會 鮎を釀る法塩少し
搦しあまを壓すと二三日にて

形くくく似たり依てくくくく ●釣瓶鮎 毛吹草 和成吉中乃
つくくくくくく曲物ハ入意くくく手をつけ 其形釣瓶の如く
一説ハ此鮎ハ鮎を煎く鮎と云く 此曲ものに入る吉野川の
水中ハ波の置く鮎も期有く玉以波ハ釣瓶鮎と云く
●月夜 雍州府志 飯すくくくの名月夜くくく六條家これ製
そくくくを月夜くくく飯の精白をくくくや ●守治丸 毛吹草
ほくくく守治の鯨鮎是くくく守治丸くくく ●鮎鮎 毛吹草
鮎中の松皮鮎俗ハ鮎の鮎と云く鮎ハ似るくくくく

馬齒

篋

篋 和漢三才圖會 篋ハ名年
篋ハ名年 篋ハ名年 篋ハ名年 篋ハ名年 篋ハ名年

光くくくく実をくくく 御膳三才圖會 篋ハ名年
篋ハ名年 篋ハ名年 篋ハ名年 篋ハ名年 篋ハ名年
此草新くくく花ハ馬宝
内くくくくくくく 四月之節

舊四月 仲夏 立夏 小満

首夏、初夏、孟夏、余月、乾月、正陽月、巳月、卯花月、
花残月、得鳥羽月、

四月

清明中 大和祭、松尾祭、平野祭、
穀雨 中 梅宮祭、廣瀬祭、菫田祭、

神武天皇祭、護土祭、大神祭、稻荷祭、日吉祭、
加茂祭、

五月 印地打

世談問答 今日童の小玉
お侍くくくくくくくく

何の故ぞ也、答、みくくくく左右の馬場まじりくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくくく

此の格は... 意を...

花蘇馬骨の着... 杜國

右冬の日... 芭蕉

右類の寒... 芭蕉

定... 作例... 芭蕉

四句目

諸妙... 意を...

月花定座之心得

去来云花... 意を...

去来云花... 意を...

去来大意

去来云花... 意を...

四季非...

四季非... 意を...

らむ 紀事 児童 柳の木を以て...

生玉の流鏑馬 五日 神社啓蒙...

今宮祭 九日 中頃... 神牛頭天王...

は 半夏生 本草 半夏一名守田...

紫羅襟花 本草 紫羅襟花一名...

花言蒲 白 花言蒲一名...

花がらみ 花がらみ一名...

羽抜鳥 羽抜鳥一名...

忍冬花 忍冬花一名...

金銀花 金銀花一名...

去来 五月は...

去来 八月十五

見つゝ... 遠慮ありて... 人の割せ... 拙も我も申す... 拙も我も申す... 拙も我も申す... 拙も我も申す...

天ニ空。雲ニ曇。の類ハ二句去の式もあ... 拙も我も申す...

句数 并去 倣 拙も我も申す... 拙も我も申す... 拙も我も申す...

表八句 倣ふ物 神教憲無常 述懐々旧名所

同字病体人名未帰へ... 拙も我も申す...

西行の軍法は... 拙も我も申す...

妙好作例あり... 拙も我も申す...

春秋 三句より五句まで... 拙も我も申す...

夏冬 一句より三句まで... 拙も我も申す...

四季 拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

長技花初... 拙も我も申す... 拙も我も申す...

鳩の浮巢 大和本草 鴉 字彙云好... 拙も我も申す...

へ 蛇衣脱 本草 蛇皮 蛇殼 童子衣... 拙も我も申す...

紅藍花 未摘花 同上 紅藍... 拙も我も申す...

桃印符 魏漢書 板中 本漢の制以て... 拙も我も申す...

蟬螂生 月令 小暑至... 拙も我も申す...

虎が雨 記事 毎年五月廿五日... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

拙も我も申す... 拙も我も申す...

あきあき
夏と冬とを
五句去二

神祇 一
多句去二

神祇と神祇三句去二

釋教 神祇と同

述懐無常 一
述懐と無常と引合

二句去二
述懐と述懐無常と無常三句去二

戀 二句去二
二句去二

山類 一
二句去二

山類と山類三句去二

水邊 山類と同

人倫 二句去二

人倫と人倫二句去二

居所 一
二句去二

居所と居所二句去二

旅体 上と同

夜分 上と同

生類 二句去二

植物 二句去二

名所地名 二句去二

四季 二句去二

非時 二句去二

時記 二句去二

所撰 二句去二

草 二句去二

寅後の近をさすつと數つづつと一とさとのさすつと
をさすつと尾花をさすつと秋風をさすつと
をさすつと

ち 二重五
月令廣義 五月五日
粽 菰粽、角
黍、籬粽

菰粽、籬粽、角黍、籬粽
字彙 粽、籬同 一名角黍
風土記 端午にかきあす粽

唐の時 歳節端午 粽の名甚多し 形制も一あり
諸記 屈原 五月五日汨羅江に投ず 楚人あきを哀れ 此日
至る毎に竹の心筒を以て米を貯へ水を加へて煮之 漢の建

武中長江の歌 回白昼三人をさす 自ら三箇大夫と稱し 四
曰 粽をさす 粽をさす 但も蚊竜子 粽をさす 粽をさす
粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす

粽の葉の心の形 粽の葉の心の形 粽の葉の心の形
粽の葉の心の形 粽の葉の心の形 粽の葉の心の形
粽の葉の心の形 粽の葉の心の形 粽の葉の心の形

香ありまへて粽の類 市人道喜と云者 巧み小まきを作る故
道喜粽と云者 粽を贈送の物と云者 之を粽と云者 粽と云者
五之粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす

長命綫 續命綫、辟兵繒、朱索、初學記 北人
五線繒、條達、端午の繒綫

を以て命救束を結ぶ子の臂に纏ふ 一名福達又條達と云
籬の物を織組む 相贈送する 及び日月星辰鳥獸の形を織金
帖画をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす

美玉と同 二美玉の葉をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす
江別下坂本より唐津に至るの路 傍に古社あり 南に若宮権現
小川湊井之内 神例をさす 五月廿三日 神樂二基 遊行を山門権藏

坊代々 兩社の事 勢報る 兩社修造の事 二
肉縁を以て 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす 粽をさす

神社啓蒙 大原神社 八丹後國に在る 神一座 伊弉諾尊
社家記 皇武内度 皇武内度 皇武内度 皇武内度 皇武内度

去歳 五月りをわか 八十七

大原志 大原志 大原志 大原志 大原志 大原志

兩社祭 兩社祭 兩社祭 兩社祭 兩社祭 兩社祭

五線繒 條達 五線繒 條達 五線繒 條達

粽 粽 粽 粽 粽 粽

菰粽 籬粽 菰粽 籬粽 菰粽 籬粽

角黍 籬粽 角黍 籬粽 角黍 籬粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

粽 粽 粽 粽 粽 粽

深類 俳諧 詩 詞 賦 用 言 兼 牙 章

衣類 二句もつゞき

衣類 二句もつゞき

降物 二句もつゞき 雨あぐらりりたしと

降物 二句もつゞき

簞物 上二句

天象 上二句

食類 二句もつゞき

時分 夕時分りり朝時分りり

火体風体 二句もつゞき

支体 二句もつゞき

二句去 車馬船頭間折

三句去 同字 月次 月 正花

五句去 同季 霞 田 竹 月 涙

七句去 移花 白 香 閨 寢

季節之跨物

簞入 出晋 彼岸 峯入

鷺 鴨 日白鳥 頬白 鶺鴒

琉璃鳥 鷓鴣 鶺鴒 鶺鴒

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

鶺鴒 鶺鴒 鶺鴒

其祭儀を車とせも禮姿糧を以て

礼と一謙道を天下に

和布 和布 和布

加茂の足柿 加茂の足柿

家願ひあふ人も亦假して

の氏人壯年のよき北人を

のよの壯年せんをそびる

高帽子洋衣を着て社司

か後馬の運速回一

足柿と云ふもの荒自結

得負を争せむ核見の者

此木を縁取の木と云ふ

馬の木と云ふ又次一本

小声を揚げ鞭を挙る見

賤群集して將の外

艾虎 艾人 判

歳時記 艾虎 天師を畫く

或ハ縁を穿つ小虎と云

戴く〇五月五日人皆百

戸上掛以て毒氣を禊ふ

飾曹 和漢三文圖會

是を飾る仍も高麗刀と

人をつとめて門上かけ

越相似たり相傳ふ光仁

早良親王をしてまを討

出陣しぬ時五月五日

て今に至る五月五日の

子藤社社の山嶽伊那

季節之跨物 五月 加 八十八

戴。豆廻。山雀。日雀。四

十雀。母秋のくた耳あるをこれ

と用。駒鳥。妻あまをいふこと

裕。鯉。秋の字を秋とせしむる

掛。乞。年の意を空めしむるも今

野遊。持の鳥あるて決めて妻社の

節供。何の節のいふかきも妻と

鮎。藻。藻と上下の字を併り鮎は若

祭。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

節。鷹。四季の鷹をいふこと鷹の

四月吉日をえらび馬を鈴をつけ人柱を蒙りて近馳以

て馬を走らせし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

川院寛治七年五穀成就天下泰年のためけりて十番正

の馬料を寄らせし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

ありて馬を走らせし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

臨時の執行に後世五月五日式日とありて古くは社毎

く競りあひし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

を巻纏を着けたる方の赤袍を着し右の方の黒袍を着し

各南一の鳥居の外に於て馬を走らせし儀をいふこと

をけしむる元右一疋毎に馳せし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

らびて競りあひし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

を走らせし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

以て馬を走らせし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

元惟子と名づく端午の節を著しし儀をいふこと馬を走らせし儀をいふこと

夕八朝の白帷子を目し近代士族人の通例ありて和名

酢漿草花。和名三葉會草。葉は三葉の形をいふこと

牧情釣草。和名三葉會草。葉は三葉の形をいふこと

輕息子。和名三葉會草。葉は三葉の形をいふこと

鹿の子。和名三葉會草。葉は三葉の形をいふこと

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

去嫌。五月の月。八十九

部類例 諸歳時記 新編 此五品ハ人倫の徳あり人倫と云ふは...

帝・仙洞・皇女・親王・新院・御門・天女・天童・鬼

佛・此十品ハ古式色々の後何れも人倫ニ...

水仙・水鶏・三日月・尾上

雪・雨・此二品ハ雪ハ雨ニツラ...

茶・酒・此八品ハ日用の物多シ...

吉野・此二品ハ連年の凶作は...

鐘・鉄漿・凡木・妻・歎

木・篠・佐々羅・翠・巻

夜分・此七品ハ古式の雑物多シ...

関・伽・筵・火・轉・寢・眠の

字・起の字・虫・砧・此八品...

冠・烏帽子・綿・木綿・此五品ハ...

跡生・師走・此五品ハ古式...

よ蓬苔 歳時記 端午 菖艾を刻み小童子或ハ菖...

た端午 五月五日端午の節端...

竹植日 竹酔日 晋書 五月十三日竹を...

田植 田植歌 早乙女 早苗歌...

豆引 時珍曰 莢の状老蚕の如し...

つ辻花 五月熟まじ俗ハ菜を取ぬるを引...

ね合歡の 見物云 射手装束日記云...

花 神農經 合歡獨念 萱草 忘憂...

射 射 射 射 射 射 射 射...

な永根 五月つねな 九十一

去嫌 五月つねな 九十一

四季 昨昔 歳時記 新編

とぞ打越を種ふハ一古今の通式ニ

指合可有分別事

あそ、はる、頃、ふ、小

て、と、はる、古式ニ大車一と

子細述 老・親子 此二品ハ古式ニ

今式ニハ各別 鳴子・網・花鳥

の繪・花・桜・楓・紅葉

古式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

今式ニハ鳴子ハ端を字ニ結ニ植物ニ二品ニ

右の根一丈二尺の... 著園集... 南天花

南天花

画譜 蘭天竹と名く... 丹砂の如く... 淨く... 豊

陽の地と大木... 作土島の山... 長丈二尺... 一寸三寸

文... 瞿麥 常製 和名抄 和名 奈天之古 止古

石竹 和名抄 瞿麥 昂と石竹之令以て二種... 一は...

夏菊 本草菊之夏 葉形菊之南

生胡桃 博

茄子 親氏切韻 茄一名紫瓜子 杜宝拾遺錄 階場

蘭湯之浴 大藏礼五 日番蘭為

日嘗蒲 京師屋樑之嘗... 嘗蒲湯... 五月五日の康を...

室明神祭 播州室の津... 社あり...

去嫌 五月ならむ

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

九十一

冬牡丹 冬椿 冬梅 紅

梅 桃 梅 梅 紅葉

山吹 郭公

日用可輕物之事

昔曉庭垣袖衿湯

汁文使

照曇泣笑植苜

眠覺起居

目鼻耳口手

足

尤可不審旋之事

老福神親子

龍民の龜

稻妻雷光鳥鵲の橋

喜柳菘後人

四季 昨昔 賦詩 記新 雜草

加茂の國一創祭五月十三日... 先洛の上加茂の氏人兩人播

女十二人... 宇治祭 八日 難宮

山極國... 宇治祭 八日 難宮

關白頼通... 鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

鶉の巢 先板

瓜の花

梅漬

蠶

藥玉

藥日

去嫌 五月 九十二

青楓・櫻鳥・泪の露・泪の雨
「青楓」は葉の形が楓に似て、花は青い。...

曾不及論物之事
「曾不及」は、物事の進行が思ったより遅いことを指す。...

雪・霰・椿・花・蓮・実
「雪」「霰」は冬の象徴。...

指合 (真享式)
「指合」は、儀式における指の立て方に関する記述。...

いづく
「いづく」は、物事の進行や状態を表す。...

いつしう
「いつしう」は、時間や順序に関する記述。...

萱草花

萱草、時珍曰萱草護作... 詩之憂思不能自遣故欲樹此草。

栗の花
蘇頌曰栗の花... 葉の形が栗に似る。...

山梔子花
時珍曰山梔子花... 花の形が山梔子に似る。...

水鶏
同上 龍鳥... 水鶏の形や性質に関する記述。...

黒とく 白とく
黒とく、白とくは、色や状態を表す。...

や山
「や山」は、山や地形に関する記述。...

田御田扇
是ハ伊勢山田大神宮の御田極... 田御田扇の由来や形状に関する記述。...

指合

五月

九十三

いづせん 一ツの上の五文字

いづにいづに 二句去

はなな 上句下句の句

むとば 濁音二句去

にふとわり 上句のふ留

ふとわり だふとふ留

ふてとまり 留と限と二句去

ぬぬとぬ 二句去二句去

ぬるとぬる 二句去

ぬんとぬらん 七句去

るる 二句去二句去

るるとわり 青蓮云廻鏡

又打越 藤の根削り

けり 下地敷て

四季 非書 戒持 已 芥 延 道

求く相向ふ所の柱

障子あき

以下句二日をえ

子産子あき

とふ所の東の華

も大神宮一の

宮ハ六本

外痔の患

楊梅 時珍曰

蛇状子 本草啓蒙

魚築打 石

ま松本祭 節日

改虫 本宮の往昔

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

菰苳 葉蘆苳

此外作例多し略之

るらん 二句去ニ

かかろ字 倍送字ニ

うぬ 幾句の外ニ願のうぬとくうぬ

かろ 二句去ニ

よよ 下知のれニ句去ニ

ろぞ 二句去ニ

つろ おをうくろ

な 二句去ニ

あり 二句去ニ

まや 二句去ニ

なり 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

な 二句去ニ

輕利あらしむらさき飛龍鳥とく亦水車水馬とく

將父老土人悉く水臨みて是をるる蓋越人舟を以て

車とし楫を以て馬とを故之是車水馬の名なり

三九國會唐人まり長青之寓居しと此自之遠くとき

教艘の舟舟とて蓋越を立く先を幸ひ群龍とく

めきひの遠くありものを後とて是竟渡之蓋屈源の

龍を逐の意ニ〇今世棋演神戸在留の外國人四月下

旬俗カケツコト唱へ五七人バツテラ少舟とて海上十

五町を遊出しそ速速を幸ふ

是龍渡の意ニ鬚鬚とて

五月五日梟の羹を作く百官賜ふそ愚者の故之五月

五日あまを合は古へ梟の羹菓の文を重む蓋を族類

を減せん

ふ粉團を射 天寶遺事唐の宮中

と後と

式藏の處の真幡守の神社二座是ニ

の皇子を合はるる二座の皇子とい早良親王伊豫親

王井上親王とて三座有る人親王早良親王伊豫親

王親王是日神樂三基行社家甲曾を着し供奉

也蓋越の馬場とて走馬一説蓋越の早良親王

は子号天神と稱し今日供奉の甲曾を着し供奉

是蒙古征伐歸陣の旗ハ供奉

甲曾を着し供奉

記事五月廿五日より六月二日迄富士の行人毎日河

出く垢敷をあら富士神像を遷拜是富士奉

たわらしとてその間男女行人をたの病をいり福

を幸む行人そとて垢敷を修ま商長

を先達と稱しそ會まるとて富士少屋と稱

今年竹

若竹、時珍曰土中の包筭

各時を以て出旬目

籊をよとして竹とあるは是即今年竹若竹

六十一年三たは花咲実を結ふ竹則若竹を筭と

指合 五月 ふと 九十五

四季 非昔 戒持 已新 果道

あ 物あつひそのもへ又つませ
あ のあつひ 皆二句去二

ら らしとらし
ら 二句去二

んとらん
二句去二

あん等
のうりりたる一字をね
いとゆり二句去二

うらち
うらちをいふ
の類二句去二

や
お合をいふ
二句去二

ま
折をいふ
二句去二

け
けし
去二句

け
二句去二
り文字打越をまらひ
けり

け
けり
けり

け
けり
けり

け
けり
けり

け
けり
けり

こ
こり
こり

て
てり
てり

さ
さり
さり

き
きり
きり

め
めり
めり

め
めり
めり

し
しり
しり

四季 非 昔 成 持 記 行 天 堂

実を結ぶを獲るといふものを藤
とつひ大なる代蕩とつひあり
茶の花
草

綱目 地衣草 大明日華本草曰此乃陰濕の地日臨
て起る苦蕒二〇石蕊 時珍曰其状花葉の如し〇玉柏

以陶別録 石上生を松の如し
〇桑花 日花本草 桑の樹の上生する白鮮也地鏡花

の如し〇本邦にも亦屋上庭園石上樹上多く苦を
生ひ五月淋面とつひとつひとつひとつひとつひとつひ

胡麻蒔
お膳三文圖會 胡
三毛ちりとも

豆
お膳三文圖會 豆
三毛ちりとも

て 天南星
お膳三文圖會 天南星は夏の平仄
三月苗を生きて荷梗

似てそ葉をさへて入るとも葉葉莖の如く両岐相
抱く五月花をさへて蛇頭に似たり葉を七月実を結

び穂をさへて石榴の子に似たり紅毛〇時珍曰
一名鹿掌 葉の形とて似たり因てあると南星

とて根は白く形老人星の如く
ある故に南星と名づく云 和名鹿掌

鐵線花
和漢三文圖會 鉄線花は花柄をさへて苗宿根をさへて生ひ一
二葉微若葉の秋に似てよく莖細く散甚動し

故疾後とつひ俗縁之蔓をさへて葉葉を依り
四月花をさへて蔓の下に葉ありて莖を抱く亦一異

ありそを白毛をさへての辨 平に兵を葉田く葉色最
艶美そ葉波をさへて天露をさへての穂をさへて似

てとつひとつひとつひとつひとつひとつひとつひ
辨既とつひとつひとつひとつひとつひとつひとつひ

あ 菖蒲を
和漢三文圖會 仁徳天皇三十九年 五月始て詔
して菖蒲を献せ 聖武天皇天平

十九年五月天皇南苑に却して騎射走馬を親たす
是日太上天皇詔して曰昔ハ五日の節常ニ菖蒲を用ひ

て護るもまのころハ昔年やまぬ今も
後菖蒲うけざる者ハ宮中に入らざる也云

の 興
公軍根源 六府あやれの興を南殿の階の東
西より朝餉の庭をさへて川主殿

指合 五月 九十六

とまのしーと現在のしー

志さゆり 清濁うらやまて

志て留り 二白ま二白の留り

志ささ 暮しきつひ

ももねり 留り 下白の

と二白と出うらやまをう以上三ツ

せせんらふ詞する

とふ詞 二白ま二白とす

あずとず 二白ま二

別吟

別吟とれたくハ難波之波大和之大

折合

折合とれたくハ下の中を花をえん

正花之事

花を往古の三本ありしを 勅許者

賞紙の慈名と任まき

四季 正花之事

寮所より言蒲をく〇言蒲の所興ハ

言蒲人形 此人形ハカ士の形を

言蒲の枕 拾

言蒲湯

言蒲酒

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

棟を佩

有無日

棟の花

正花之事

五月

九十七

又標の字を用ふ〔披草紙〕木のきほひはくろくをさぐり
あまのの花をそむりしり〔異〕それをもろくくさる異
こくすくろくあまの五月〔異〕五月
五日のたをともる〔異〕五月
韻語陽秋唐の招賢寺の山花ありて色紫氣香しく
穠麗愛まべし人そ名を知らず者ふし白樂天を
過く標をさるも其名を世陽とらん〔和漢三文園會〕花
叢生も並繁綺繡の葉を以て五月花をさる也〔異〕

春の正花

花の杜鵑古式夏より真亨式
今梅もるに漢家の詩はハ
杜鵑も蜀魂ともつひて暮春の思ひ物さるるハ
幸に其例をうりて暮春の用とさすハ
今ハ本もり学の筆に結ん決りて暮
定むぐしし

夏の正花

若葉の花〔真亨式〕今梅もるハ
月花を風靡ハ一巻の
飾もまけ踏きたる物も加減して四季を
自由配るもさい若葉の花をますびて
決りて文と定むぐし

秋の正花

花火夜分ニ
花相撲

花燈籠夜分ニ植物ハ
ちりちり

冬の正花

歸花餅花植物ニ
二のまニ

雑の正花

一書ニ雑の花ハ花ハ花ハ
出るは花を階の階とさるべし
次の階白のまを階の階とさるハ
重ドトたる蕉門の欄あり云

〇書云蕉門の欄あり云
及ハ蕉門の人の後世も雑の花ハ
まらハ好むし

四季

非華或時記折葉

正花之事

五月

あま

九十八

五月の鏡〔異〕

朝菊

花露花露花露花露
花露花露花露

何ぞ

池沢の中〔異〕

杏子

本草綱目〔異〕

青梅

荒布苜〔異〕

栗時

和漢三文園會〔異〕

五月の鏡

五月

あま

九十八

作花 植物三百卷之 **花塗** の

車ニ植物之何れ **花うひらぎ**

數種ノ模様 **茶の花香** 食

植物ノ類 **花形** 鼓

人偏ニ **燈火の花** 植物ニ

花うつわ 含意ニ植物ニあり

花紅葉 春ニ云(春集)

貴之ヲ持 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

例 **戀の詞**

折る則雨 **搜神記** 金錫の性あり五月丙子日午時鐘

高臺を引て云陽燄一名陽符火を日

五月五日を以て揚子江心の水を取

則ち佳あり **寂勝講** 公事根源先

四々の大寺 東大 真福 延暦 園城

證を清縁殿 **五月雨** 梅雨 入梅 徽雨

中梅美 入梅 入梅 入梅 入梅

鬱 入梅 入梅 入梅 入梅

閩人立夏の後庚日 入梅 入梅

出梅 入梅 入梅 入梅

百三十五日 入梅 入梅

郡丹生山田の庄原の村弁天の祠

らを痛て期を愆 **神の花** 和漢三式圖會

木 龍眼木 和名佐加波 正字未詳

深青 香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

香久山の坂樹を取 天の窟戸の事

五月躑躅

花史 杜鵑花又石巖花

五月 五月 五月

五月 五月 五月

五月 五月 五月

五月 五月 五月

五月 五月 五月

涙の海、涙の雨、袖の泪、袖の露、

袖の海、涙の籠、袖の雨、旧の川も

恨 うらみ 恨 うらみ の山、恨の海、

夢 白体 夢の道途 雅語

夢のたぐ 雅語

婿入、婚入、婿入、婚禮

新枕 待女郎、貝桶

若後家、若衆、寺若衆、町

若衆、男色、美少年、小々姓、

念者 男ををいふ二の谷娘軍記

念者 六孫大底補の殿、宝曆元年印行

別の袖、逢ふ

密言、真言、私言

多玉章、艶書、みうら

手話、袖引、尻巾

前 人位

契 ちまりの末、ちまり

二世の契、うた ちまり

四尊非著 成非也行

愛まへしとく山溪間より出とをを得く

追り上る 車輪のめぐり

車百合 同上

鹿子百合 同上

透百合 同上

水鳥の巢 浮巢

神水 金門記

新宮祭 五日

下毛の花 同上

越瓜 時珍曰

葳菜花 同上

五月

百一

身たしあまゝ。 独あ。

人目。人目の関。人目を思ふ。

目之むせ。神祈。憂別。

うき人。色。色好。色こ。

ちり。うき名。もろ名。あむ。

名。あぶ名。あぶ。思ふ名。

待。待音。すん人。すん。

待。待音。すん人。すん。

鏡。十寸鏡。姿見鏡。占。占方。

は占。口占。灰占。夕卦。夕占。

夕暮。夕暮。夕暮。夕暮。夕暮。

形見。出家落。隨流。を云。

坊主。おとし。あは丘尼。

中。声。あを。あを。あを。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

あ。あ。あ。あ。あ。あ。

花の葉。白くし葉の臭。臭。臭。臭。臭。

ひ。未尖極。ひ。未尖極。ひ。未尖極。

菱の花。時珍曰。菱一名菱。菱。菱。菱。

批把。廣志。批把。批把。批把。

移時。時珍。移時。移時。移時。

も。も。も。も。も。も。

の。の。の。の。の。の。

世。世。世。世。世。世。

石。石。石。石。石。石。

住。住。住。住。住。住。

脚。脚。脚。脚。脚。脚。

五月。五月。五月。五月。五月。

百。百。百。百。百。百。

戀之詞。戀之詞。戀之詞。戀之詞。

父あし子。終るの神。

懸文賣。一月廿の部。注ス

水つらひ。一月みの部。注ス

常陸帯。一月ひの部。注ス

筑六錫。四月つゝの部。注ス

雜喉症。十二月をの部。注ス

新河とす。子をおんま。

仇とす。一二月をの部。注ス

垣間見。その一を垣間見とす

虫の印。印とす。守宮の印の

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。守宮のうらみ春の始。

田植。カ合。履陽群談。移事。任吉神田を植る。以て神夏

を世に傳ふ。神功皇后三韓を征し

よりて種女をうむ。子孫をうむ。神功皇后三韓を征し

人其まゝ。まゝ。神功皇后三韓を征し

を世に傳ふ。神功皇后三韓を征し

似る。似る。神功皇后三韓を征し

代の。代の。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

實情。實情。神功皇后三韓を征し

六月の忌火御飯。五夜。忌火御飯。五夜。忌火御飯。五夜。

以御臺盤一。以御臺盤一。以御臺盤一。以御臺盤一。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。公事。

単に... 待たぬ... ちり... (宝物... 海草...)

男をよみ... 記

ぬく... 下紐

身をよがす... 拵切

髪切... 尻目注

うら... 思ひさゆ

背中の中... 侍

艶物の怪... 後めつき

枕... 枕

近きまわり... 近きまわり

近きまわり... 近きまわり

依れ... 古きまわり

志... 親する中

四尊... 俳諧 雑言 雑言 雑言

と名く蓋... 廂廊を... 池の所...

伊勢祭禮... 廿六日... 延喜神祭式

泉... 泉殿... 滝殿... 神泉...

井戸... 井戸... 井戸...

白麻... 白麻... 白麻...

標の花... 標の花... 標の花...

泉... 泉... 泉...

井戸... 井戸... 井戸...

白麻... 白麻... 白麻...

標の花... 標の花... 標の花...

泉... 泉... 泉...

井戸... 井戸... 井戸...

白麻... 白麻... 白麻...

標の花... 標の花... 標の花...

泉... 泉... 泉...

井戸... 井戸... 井戸...

白麻... 白麻... 白麻...

標の花... 標の花... 標の花...

泉... 泉... 泉...

井戸... 井戸... 井戸...

白麻... 白麻... 白麻...

標の花... 標の花... 標の花...

泉... 泉... 泉...

井戸... 井戸... 井戸...

一説、又ふくく思ひうらむと親の制し
しつて遺るゆゑ云々

二道かくる。悔のむら

あひ。(日本紀)やうせとて東海を
あひさうのの悔のむら

濡衣。あきさ
ひのてきと

濡衣の濡衣を借ぬて朝をぬきぬ
外新にぬきてその衣をぬきぬ

いそむれば父をたたくて娘を害しぬ
のまかの娘父をたたくて娘を害しぬ

いぬまをたたくてそのぬれ衣をぬきぬ
あきさのぬれ衣をぬきぬ

誰を殺けたりあひさ
はまろく

酌。人々を酌する人のあきさ
はくろく

神々のあきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

さくらぞと恒。山城の朱雀のあきさ
あきさあきさあきさあきさ

錦木。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

誓文起請。男女たうのし
あきさあきさあきさあきさ

かきある沓。女のあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

肉陣。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

後宮。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

美人の名。美人を畫。
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

のたのひくしてきてあきさ
あきさあきさあきさあきさ

ろ六月會。或ハ傳教會。長講會。あきさ
あきさあきさあきさあきさ

傳教大師の忌日。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

命使あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

神護景雲元年。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

貞觀八年八月。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

同車。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

は博多祭。博多、博田の神社を筑
あきさあきさあきさあきさ

の神中殿ハ博田垣令。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

天照皇大神宮。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

山。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

を着せ。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

領主の家臣。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

三基供奉の行装。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

風土記。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

切戸の文殊安置の道場。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

宛車追加。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

号寺号。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

年任。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

十石。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

右の大竜王。あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

あきさあきさあきさあきさ
あきさあきさあきさあきさ

返魂香 李夫人の李延年より、武帝の夫人あり返魂香のくも世人のする供もあまの里を

空燒 薰物、留伽羅、神の

化粧 紅粉、

白粉、爪紅、的、黛、

眉掃、鉄醬、白袋、ふ二

額、丸額、密男、妹

許ゆく、女のくへゆく

紅綯 (百陀羅尼) 華の水うり

夫、婦、女房、男房、宮人

妻、外婦、房、花街、遊里

大磯、祇園町、浅妻船、吉原

の里、崎倉の里、新町の里

四季 俳諧 田言 菜

かゝる処を浮世と云俗に三保ハ指斗にしく櫻立ハ一の枝
九世倭と云世切戸の文殊と云是ハ外外の廣子日の侍、美
代の廣子と云ハ此櫻立の別名ありん、○童灯の松月、
蓮花の松月

蓮花 蓮の花、菡萏、蓮花ニ愛蓮記蓮、花之君子者也、池
見草、露堪草、水堪草と云、呉名ニ蓮の空、貞徳曰蓮、
花之実を具し、秋の蓮の實ハ

蓮根、蓮の葉、蓮の實、蓮の花、蓮の根、蓮の葉、蓮の實、蓮の花、蓮の根

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮、蓮花、蓮

青楼 妓門。娼門。浮身宿。

同船。妓家。揚屋。遊女。

うかき女。流の君。傀儡女。

提君。雛妓。宿女。夜突。辻

君。女郎。たそぎ女。一夜書。

傾城。傾城傾城ハエ美人の給

禿 (尾巻一笑)了鬘。妓の幼穉なる者

鶉老 妓の老母ニ 紋日。ぬ

あげ。まひつけ煙草。

けけざし。飲けたり酒を

び異産。思び

編笠。あつちの田町(今)の田町。

曉傘

元禄の頃江戸吉原の花街中まゝぬく

のわり終つてあるは今のをまゝなり

をを今(五元集) 其角

亡八 蓮花のハッをとてゆへに名づく

女樂 舞姫。白拍子。伽や

野。即。色子 陰問

飛子。陰

神媒 (正字通)路史。女端

正姓。城取。婚同是曰

神媒

四季 半皆或時記片

求部平ハ故秦の東陵候ニ秦亡ひて布衣とけり。貧しくく

瓜を長安塘の東ニ種瓜五色あるを志美二世と名を長陵瓜と

云又支那の瓜と東門。青門。瓜

のふあまも部平ハ故事あり 稿突

さす所以のふの二種數種あり深山とあり。葉大にて

子を結りたるもの 藪ト云く。子を結ぶもの 藪ト云く

かきそをももろし木の葉女貞と似て。光澤あり。四時

潤り。毛もつ。三分。葉も四五。五月。細毛。白花を并さ

子を結ぶ。正田。熟も。紅。色。攪り。て。甘。す。木。乃

皮を剥く。水。浸。一。輝。り。て。是。を。流。水。之。徳。く。皮。渣。を

去。ま。り。麩。の。め。く。て。を。粉。を。人。心太

用ひ。く。鳥。雀。を。粘。毛。是。を。穂。と。す 凝菜 和名抄 大

留毛波。俗用。心太。二字。古古。布。止。閩書。石。花。菜。ハ。海。石。上。生。セ

性寒。夏。月。は。れ。を。老。く。涼。く。多。き 本草。瑞枝。本。形。式。凝

ち 竹生鳥祭 十音 神社啓蒙 竹生鳥神社

天皇天年三年。幸。竹生嶋現形。神社考。竹生鳥ハ。江州の如

中。あり。之。巖。石。吹。勢。宝。珠。多。し。本。朝。五。奇。異。の。一。也。傳。り。云

卷。靈。天皇。四月。江。の。地。游。て。水。浴。す。水。浴。す。水。浴。す。水。浴。す

忽。出。景。行。天皇。十年。湖。中。竹。生。嶋。初。り。洞。出。也。昔。竹。生。祭

善。護。此。島。の。事。を。神。女。現。形。行。其。け。り。是。く。昔。と

違。う。并。天。の。像。を。並。祀。奉。り。六。月。の。日。を。祭。奉。り。會。と。云

湖。上。舟。を。停。り。音。響。を。奏。せ。神。輿。の。船。上。に。停。ぶ。〇。社。僧

説。曰。此。祭。ハ。江。州。渡。井。郡。の。中。に。豊。富。の。人。を。釋。と。頭。人。を

定。む。田。記。云。神。龜。三。兩。重。年。天。聖。皇。太。神。宮。に。奉。り。見。し。神。勅。す

し。若。倉。山。太。神。宮。寺。と。云。額。を。送。り。由。り。於。此。觀。音。を。宣

嚴。寺。と。云。同。年。三。月。十。日。武。元。皇。儲。弟。兄。房。弟。六。日。雨

勅。使。を。以。て。蓮。華。會。を。修。せ。り。是。の。由。り。て。一。以。末

今。ま。ま。く。祭。奉。り。蓮。華。の。法。會。ま。ま。く。蓮。花。を。舟。に。載。置

切字

六月 ちりり 百七

二字切

三字切

二段切

三段切

をほほし

しほほし

言妙切

大端し

無名の切

口合のや

切や

切や

中のや

四季

伊言 嵐 日言 霜 霜草

せほし

貞享式 此名ハ倍習之或ハ海辺の別荘ニ或ハ船庭の時ニ魚のあつたりしきをせほしと決

わ 綿の花

和漢三才圖會 四月種を下まじ莖

か 嘉定

喰

嘉定録 十六日 世談問答 六月十日 嘉定園

白鬼を敵と以て吉報としし程之是もこのく... 嘉定園

司の日記に云く ○一説に嘉定喰と云くハむろ... 室町殿

所湯着記に女房記に云くハむろ... 室町殿

食物を以てハむろを腹せられハむろハ... 室町殿

上難波御坂

大坂高津の宮ニ有

深淵比賣古曾の神本名ハ下照姫神 大國主命ニ始り天

切字

六月

か

百九

部類 創言 京田言 兼天言

もののや

ものや 意ま目にあく法の廻

まじりのや

まじりのや 甲の下のまりく

あしりのや

あしりのや 出せや寺さるの

名所のや

名所のや 難波津や田理のふもとを

疑のや

疑のや 疑はしむるや神を

○此やういふのやと疑のやとてきま
下はふま。なま。疑。き。意。さ。
ま。字。あ。ま。し。ま。ま。ま。の。ま。ま。
ま。ま。の。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。
ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。ま。

社司本津川を
禊を修む

加茂六月能

能事 六月の夜上加

加茂の神事本津川を禊を修む
加茂の神事本津川を禊を修む
加茂の神事本津川を禊を修む
加茂の神事本津川を禊を修む
加茂の神事本津川を禊を修む

唐崎赤

唐崎赤 唐崎赤 唐崎赤 唐崎赤
唐崎赤 唐崎赤 唐崎赤 唐崎赤
唐崎赤 唐崎赤 唐崎赤 唐崎赤

形代

形代 形代 形代 形代
形代 形代 形代 形代
形代 形代 形代 形代

雷鳴陣

雷鳴陣 雷鳴陣 雷鳴陣 雷鳴陣
雷鳴陣 雷鳴陣 雷鳴陣 雷鳴陣
雷鳴陣 雷鳴陣 雷鳴陣 雷鳴陣

風薫

風薫 風薫 風薫 風薫
風薫 風薫 風薫 風薫
風薫 風薫 風薫 風薫

香

香 香 香 香
香 香 香 香
香 香 香 香

川符

川符 川符 川符 川符
川符 川符 川符 川符
川符 川符 川符 川符

射下

射下 射下 射下 射下
射下 射下 射下 射下
射下 射下 射下 射下

干瓢刺

干瓢刺 干瓢刺 干瓢刺 干瓢刺
干瓢刺 干瓢刺 干瓢刺 干瓢刺
干瓢刺 干瓢刺 干瓢刺 干瓢刺

切字

六月

か

百十

四時 俳諧 歳時 三行 歌集

四時 俳諧 歳時 三行 歌集
四時 俳諧 歳時 三行 歌集
四時 俳諧 歳時 三行 歌集

不動言の切

も重き切字あるも白の下切の
羽をみるゆる大く心まきあ
まののりもあふ年のの意
様予の夜もあまのま
有りのまのりもあまのま
ゆけらるるまのりもあまのま
先哲の作例かくの如し

神祇之格

尊々たるまのりもあまのま
おのりもあまのまの神の意

叙教之格

臣等もあまのまの意
後佛の日もあまのまの子

憲之格

紅彩もあまの意もあまの意

各事之格

やうくあまの意もあまの意
意もあまの意もあまの意

追善之格

秋風もあまの意もあまの意
當座もあまの意もあまの意

述懐之格

ふりもあまの意もあまの意
父母のまもあまの意もあまの意

羈旅之格

みもあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

銭別の格

年魚の子もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

名所の格

あまの意もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

所興の格

あまの意もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

四季 伊部崇時言新書

めは固く封も大低
七十五日にて成る
納豆造ル 同上 納豆造
鐘有り大低

鹹鼓の法より出はる酒
者とははる家まきを重き
夏切茶 月日
茶の意

字はの茶人新茶を新茶も盛る
茶の良飯の家も贈る是を友切茶
紙糊にて堅くまき張る規温を
へへめぎ茶用もあまの意もあまの意

の蓋金目の粉もあまの意もあまの意
の口を切るといひを口を切るといひ

山形清涼の他もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

夏ぶし

雑談抄 髪沸瘡と云ふ
小児の頭瘡に江戸の俗語にて云は

む 虫干 虫拂 虫干 土用干
和俗六月土用中 天日の晒るを俟て衣服并書
の類もあまの意もあまの意

律 茂る 律 茂る 律 茂る
あまの意もあまの意もあまの意

に細き刺もあまの意もあまの意
微塵もあまの意もあまの意

子もあまの意もあまの意
山賊のまもあまの意もあまの意

水もあまの意もあまの意
ゆりもあまの意もあまの意

俗もあまの意もあまの意
附もあまの意もあまの意

大もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

葉のあまの意もあまの意
葉のあまの意もあまの意

年六月廿五日 日輪る竹切之夜
あまの意もあまの意もあまの意

あまの意もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

あまの意もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

あまの意もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

あまの意もあまの意もあまの意
あまの意もあまの意もあまの意

今之格 六月 百十四

景清も花をのりて七多勝
わづらひきけはたまたま用取最

益畫之格

益畫之格とは花をのりて七多勝
降まるとも花をのりて七多勝

益讀之格

益讀之格とは花をのりて七多勝
山多や花をのりて七多勝

疊字之格

疊字之格とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

時宜之格

時宜之格とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

時宜之格とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

賀之格

賀之格とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

雑之格

雑之格とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

押字

押字とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

上より下へ下より上へ
上より下へ下より上へ

四季

四季とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

を著し山刀を佩座上と出づ一本の竹を近江と吟し
本の竹を丹波と吟し法外者十人左右に別れ同時夢

を揚り山刀を以てておきを賣るその邊まゝより
兩國の山をよぶ連うものもさきかたりとつたき

て後を竹切と云ふは山堂を著り又殿にさきを賣
ることを竹切と云ふは山堂を著るものと云ふ

松提寺巡禮和尚室中を著ることをトス雄雄の天蛇あり
巡禮持念も蛇想も死も禪一蛇と謂く曰山刀水玉一水

を施まてしと蛇想を以て去儀して清泉涌出も今の園
仙舟と云ふ寺説竹切の具より蓮花會と云ふ中興昇

山岸延和尚咒法を以てて蛇を斬るの意なりと云ふ延
の遠忌會之夜の護法八昇山巡禮一蛇を救ひ護法神と

あせしと云ふの峯
社詩寺の峯突元火雲昇
陶潛詩女まき多き峯

高の花

高の花とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

海月取

海月取とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

霍亂

霍亂とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

道度の致も所胃中擾乱上吐下瀉する者也霍と
腫と古字通用説文云腫肉美之大疾人の食の汚

傷も処肉食汚多故と特腫を擧る一應食物を統
るなり元人甘嗜飲まると吐き色散れつく○霍

云極毒毒物たは先版の花粉香粉の毒花を云ふ
の毒に由るもつくもむく風流と云ふは今も

の毒とつくもむく風流と云ふは今も
附白と云ふはの毒とつくもむく風流と云ふは今も

雀の目
行塚の上と云ふはの毒とつくもむく風流と云ふは今も

雀の目
行塚の上と云ふはの毒とつくもむく風流と云ふは今も

雀の目
行塚の上と云ふはの毒とつくもむく風流と云ふは今も

雀の目
行塚の上と云ふはの毒とつくもむく風流と云ふは今も

雀の目
行塚の上と云ふはの毒とつくもむく風流と云ふは今も

甜瓜

甜瓜とは花をのりて七多勝
花をのりて七多勝

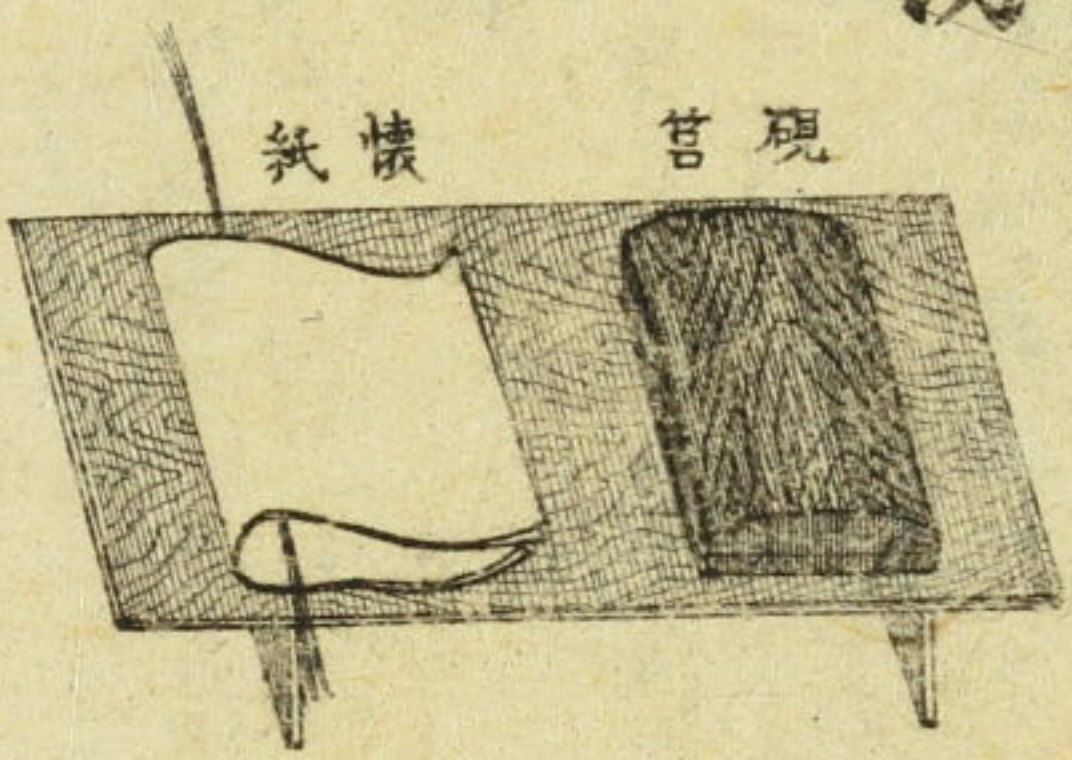
部類 伊言時時詩新

抱字

夕影の如くくゝの飄る
 上もとちん下も...
 けむさる...
 如の字を抱く

執筆の式

文臺銘



硯管筆一對

筆。錐。小刀。法。

○文臺の頭を床の方へ向け...
 ○座見出...
 ○板の厚...

四季 作 筆 法

積日二三月種を下し... 美濃國本業郡...
け **解齋御粥** 四月十日...
ふ **富士詣** 六月十日...
毛虫...

執筆式 六月 百十六

道く三四の折に水引を現るの蓋の上より正ま一二の折をもちて出せば

一二の折をもちて正ま一二の折をもちて出せば

○表六も月出ぬ出づる時を七月目

四季神歌多所採集

四季神歌多所採集

七代孝靈天皇五年は海國地折る湖濱の宮富士

富士社縁と号す大山祇女

舟遊

風蘭

振舞水

二水餅祝

毛吹草

餅雪水

黄雀風

極暑

需教

金龜子

天満御杖

俗事虫

人の重儀ありかゝる者時々又春の首を
床の方に向くかゝるべし向るこゝ
ろ梅あり

○筆を先初るより始後筆を初るより

入るは下より上へ向くは上より下

へ向くは下より上へ向くは上より下

○表八の上東書は端の附白を書き付

く修二の打越をさす裏二つりの

白は二の打越をさす裏二つりの

末二の打越をさす裏二つりの

二の折の端を押し左の折の端を押し

妻の向くは妻を押し亦打越を押し

た先ある相二の折の端を押し

ぬく二つりの下も二つりの折も同じ

る終の折はハナトヤス

○筆合去極をもちてゆけり

うらび威儀は一々ある座を以て筆

茶畑字もかゝる飲もくは文の

可し指合を極く極く極く極く

○吟書けりやるも極く極く三の折

ハ別して高声の吟書くは一層の

之故筆の端に二の折の端を

○筆合去極をもちてゆけり

うらび威儀は一々ある座を以て筆

茶畑字もかゝる飲もくは文の

可し指合を極く極く極く極く

○吟書けりやるも極く極く三の折

ハ別して高声の吟書くは一層の

之故筆の端に二の折の端を

○筆合去極をもちてゆけり

うらび威儀は一々ある座を以て筆

茶畑字もかゝる飲もくは文の

可し指合を極く極く極く極く

○吟書けりやるも極く極く三の折

ハ別して高声の吟書くは一層の

之故筆の端に二の折の端を

○筆合去極をもちてゆけり

うらび威儀は一々ある座を以て筆

茶畑字もかゝる飲もくは文の

可し指合を極く極く極く極く

○吟書けりやるも極く極く三の折

ハ別して高声の吟書くは一層の

之故筆の端に二の折の端を

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

申の時と神託ありて曰難波の輪をまき

四季 非 昔 成 時 已 所 集 道

附合 六月 百十八

附合之事

諸風体口受 三ヶ之大事

○殿身三四の目まきの自方ハ

或ハ肉骨ハ五義行ハ五義十

三義五体ハ五義ハ五義ハ五

も力をするハ五義ハ五義ハ

初めのいふまけハ五義ハ五

時合を付するハ五義ハ五

麻の葉流

本草、麻の葉を切て糝とす

暑日

暑日、日とす

青嵐

青嵐、嵐とす

愛宕の千日詣

此所神社の供所あり

伊弉並尊少人等並神

所前軒遇榎命奥の御伊

寺修六坊とすこの日春

是を肩してはる摺り

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

はる摺り免るは凡六坊

○其白之服附多事

女物の相もろくつろく初時雨
すくは風の末の雲を川する

昔の初しきは題を著る趣向の
あまのあまのねははくくあまのせ
白作あり

服の初しきはくせく吹風とつけてね
木の葉とつらう著るの結しきくまつま
せしうかいつらうくく合せしうの作
是を打添の服と云

市中の初にむしや夏の月
暑しくと門ののり

登り川女の月う懸ニ市中の懸向し
物のうまひとせしう懸向く懸の月の
あまのむしきしての白作ニ

服を暑しくとつらう夏の末に甘く
月ハ二心の間うあまね市中とつらう門
とつらう声も物の白しとく人ニ對して
情をもむしきするはく
是其場ニ

厚くもまつたつらうくくくくく
酒まの想ふまのくくくく

此の白の川夜の夜と懸しとく掛投の
贈る言のくまのくくくくく
川夜の末にむしきしての白作ニ
川色の懸ある並懸る末にまてつら
るかつらうくくくくく
受つらうくくくくくくくくく
やうくくくくくくくくくくく
の移る言のくくくくくくく
あまのあまのくくくくくく
の月とつらうくくくくくく
なれはあまのくくくくくく
著るの厚くもまつたつらうくく
是相對の服と云

葉のくくくくくくくくく
山くくくくくくくくく

此の白の川夜の夜と懸しとく掛投の
贈る言のくまのくくくくく
川夜の末にむしきしての白作ニ
川色の懸ある並懸る末にまてつら
るかつらうくくくくく
受つらうくくくくくくくくく
やうくくくくくくくくくくく
の移る言のくくくくくくく
あまのあまのくくくくくく
の月とつらうくくくくくく
なれはあまのくくくくくく
著るの厚くもまつたつらうくく
是相對の服と云

四季 非鶴飛時也降葉翁

養て含く赤
白の二種あり
き 祇園會 七日 神社階段二
十二社註式人

皇六十四代口融院天祿元年六月十四日御靈會をけしめ
今歲より是を行ふ祀事 先七日の初大祥六本古四

多通東、度も古六本の祥祥号ありと長刀鉾、函谷
鉾、月鉾、菊水鉾、雞鉾、放下鉾、又山鉾本あり古四
四季彩鉾に中一あり略を相傳ふ長刀鉾の長刀ハ二条

小綴治宗近う作ありと民間瘡を患うるもの古四
頂くくく病愈ゆと云此祥毎年の例之闕をくく
子一番く度くくく山鉾の由来祇園祭礼記を考へ

二十四日山八本三条通の西より度も神樂三社七日
少後新へ渡所なり十四日幸社遷幸一幸の行廻の
美麗くくくく
古例ありくく
祇園臨時祭 十五 祇園祭元抄
大延三年

圓融院の御宇六月十五日始く走るを奉る初樂東遊
巾幣中の使古少將右原理兼左右馬五匹あり左右近
衛の官人供奉もくく中絶も
宗徳院天治以後毎年お後も
備後朝儀 今日九度法と稱し南門の外弁度松の邊
くく神をくくく付返九度くくく神拜をあせり是

聖廟此地遷座の日ありくく九度法ハ九四の義を
用るくく○天曆元年六月九日始く山野くく
木耳取 時珍曰木耳打木の上を生む故葉は
厚熱の毒を生むくく所木耳本賦と云
麒麟草 漢名詳くくくくく
てくく花はくく
景天の別種と云
金血 扶別原郡田垣山露村
くくくくくくくくく
金の**銀血** 考の産す
如し**白雨** 考
月合此月土潤澤暑大雨時行 漢字和訓 五志謙ニ云夏の
酒まき茂録酒くく白雨くく書くくハ天満の森乃
由已法橋山谷詩ありと申きしハ九執筆の時
書始一文字ニ離離註 凍雨ハ夏の瀑也
夕

顔 和漢三大會 披摩種を下し立夏に始く
五六日正白をくくく日本ハ潤くく暮ニ始く
顔の二種あり
み 御手洗指 十九日ハ亂ノ納
三寸ハ涼

山嶺園愛宕郡乳或ハ下野ノ作下野ノ作ノ乳
の宮くく蓋地もくく是をくく社ノ乳ノ先
附合 六月 ゆみ 西九一

くつと根の月を東に月を西に延べし
夢の如き日の凡そ花の如くさへし
田の十甲の如く凡そ花の如くさへし
ありては所を二め九と来しわのを
さうとて物をあまきりきりきり
あつとてとて頭の子を何色に移し
行の字を車にし一は極又けしきり
くつと根の月を東に月を西に延べし
夢の如き日の凡そ花の如くさへし
田の十甲の如く凡そ花の如くさへし
ありては所を二め九と来しわのを
さうとて物をあまきりきりきり
あつとてとて頭の子を何色に移し
行の字を車にし一は極又けしきり

是打添きく時小預二

牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片

牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片
牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片
牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片

川の如く水清き流りて溢き流りて是を流るる也
の之を人此水臨き流るる是を流るる也
川合の社の朝位皇の東の川辺にありて之を流るる也
ま十九日すくす十日に流るる也
あはれ林間は夜に流るる也
又ハ小園子を流るる也
巻瀧の神たる罪を流るる也
置戸を以て流るる也
罪を流るる也

●所教川、所教寺、石影、西ノ滝、大堰川、河合、耳
敏川、東ノ瀧、松ノ寺、石影、西ノ滝、大堰川、河合、耳
●所教川、所教寺、石影、西ノ滝、大堰川、河合、耳
敏川、東ノ瀧、松ノ寺、石影、西ノ滝、大堰川、河合、耳

茗荷笋 蓮根田裏荷、春初く、葉を流し甘蕉
根を流し、根を流し、根を流し、根を流し

水芙蓉 眞享式
下ノ在る生るる也、根を流し、根を流し、根を流し

道饗祭 公事根源 是を流るる也、神の祭にともひ日毎
年行りては、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

勝曼参 元亨釈書 推古天皇十四年秋七月
太子聖御、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

神今食 公事根源 神今食
行りては、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

志渡寺祭 渡部寒河那補陀洛山
清光院志渡寺、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

水葵 本名葵、又是葵とも水
鏡、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

道饗祭 公事根源 是を流るる也、神の祭にともひ日毎
年行りては、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

勝曼参 元亨釈書 推古天皇十四年秋七月
太子聖御、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

神今食 公事根源 神今食
行りては、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

志渡寺祭 渡部寒河那補陀洛山
清光院志渡寺、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

水葵 本名葵、又是葵とも水
鏡、是を流るる也、神の祭にともひ日毎

牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片
牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片
牡丹若く打の如くありぬ二三片
亦月世の如くありぬ二三片

どくくも... (main text block on the right page)

○遺句... (top section of text on the left page)

是を向附... (bottom section of text on the left page)

磯... (text at the top of the right page)

火祭

公事根源 下郡氏の人をうさて宮城
の四ツ...

日威

杜南菩提行日祝融南
來鞭火龍火旗燭々焼

火蛾

和曆三五圖書 蝗蝻
燭蛾俗云ともぬ虫

天紅日輪當午凝不
去萬國如在紅甲中

人々欲貪飲の... 身今... **百日紅** 格物論

花燈... 鼓子花 辨をみる

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

花... 鼓子花

木の... 竹も後と様うぬ
西の... 文書ニ
猿人の... 尊慕て

醫白... の... 進ひる...
後... 文書...
西日... 文書...
これ... 文書...

此後... 文書...
相... 文書...
時... 文書...
移... 文書...
を... 文書...
を... 文書...
を... 文書...
を... 文書...

此... 文書...
て... 文書...
た... 文書...
弁... 文書...

長會... 玉

國詠... 王招涼之珠當

菅... 和漢三才圖會... 菅本... 載... 蓋... 菅...
三... 載... 蓋... 菅...

附... 草... 葉... 乾... 白...
足... 根... 葉... 乾... 白...

水飯... 洗飯... 弄花... 飯... 水... 飯...
足... 根... 葉... 乾... 白...

舊六月... 林鐘... 大暑... 季夏... 此期...
朔月... 陽水... 風待月... 鳴神月... 常夏月... 水無月...

六月... 芒種... 丹生... 貴船... 東照...
夏至... 八坂... 札幌... 熱田... 住吉...

